

## 《編集後記》

- ◆上田女子短期大学、児童文化研究所の『所報』第16号をお届けいたします。  
本年度は学長も西尾光一先生から、新学長の京極興一先生に替わり、教職員一同新たな気持ちで、取り組んでまいりました。  
また『所報』の編集方針も、従来の方法でなく、論文編を前頁に、児童文化研究大会の特集を後半に移しました。
- ◆今年度は激動の年といわれるように、連立政権・内閣の成立。長雨による米の不作。バブル経済の崩壊。不景気による女子大学卒業生の就職難。「大学・冬の時代」といわれる、18歳就学年齢人口の減少と先行き不安がつきまといました。パッと明るい話題がないものでしょうか。  
こんなことを書いていると、研究所の窓から、隣接の附属幼稚園の子どもの明るい歌声が聞こえてきます。
- ◆特集は当研究所が主催した、第16回児童文化研究大会のものです。研究大会は、秋晴れの平成5年10月16日上田女子短期大学で行なわれました。  
記念講演は国立音楽大学教授・繁下和雄先生をお招きし「歌がうまれるとき」の演題で、カセット・テープや、ギター演奏がある魅力あるものでした。子どもの歌の覚え方、泣き声は実に歌になっていたり、つい話に吸い込まれてしまいました。  
分科会では大屋幼稚園の先生方、信濃医療福祉センターの関係者、上田市芙蓉保育園の先生方に研究発表をしていただきました。学内の学生、教職員をはじめ、大勢の方々による討議が行なわれ、盛会のうちに終了しました。
- ◆『所報』発行にあたって、論文、レポートなどお寄せいただきありがとうございました。今後とも、当研究所をご支援下さいますようお願いいたします。

編集委員 山本 秀麿